



南總里見八犬傳第六輯卷之五上冊

東都 曲亭主人編次

第五十九回

京鎌倉小二犬士四友を憶念せ
下毛州赤岩庚申山の紀事

再說犬田小文吾の依介夫婦小辞一別れて市川の宿と申し且行徳へ立ちて
亡兩親の起行の告別をせむとて笠をかきしとて程小を香華院へまふけし
準備の密を携へて寺門に入りて墳堂戸を叩き桶索を汲揚り阿加井の吊桶
桶池に漏りていよいよ袖濡るる歎死の露の離歎と外の率都婆も徳る憂
子聚み身ひとつの心はなをいかに不巻柏をぬ雨後の苔洗ひ流して手向の水
うらむる影もあはれ人の名をのこ送を石塔さうち對ひて額つぎに向ふ時を授
けり救あるべからざれば稍身を起して外面へ退れ申んとて夢を萬里丹逆旅に



松野
勝音院

考りけ案下一生又説一生犬飼現八信道へ去歳の七月七日の危難ハ荒茅山路を
 越えて踏留りて立塞り追々敵を防ぐ程不道節信乃莊助ホと別々ホあり
 ち終不送不往方告知らばやうやく追兵と殺退けく其処ともさぬ深山路迷ひ
 々一辛くして信濃を投く西三日雖蓮々々道節ホ絶くはあはれあり一人心
 づめ安くぬ肚裏ホあやう吾曹ハ幾回とかく必死の厄遭ふととも神明仏陀の
 護らせゆ又瑞玉の奇特依れぬ身ホ恙無死を免へ犬塚大山四箇此
 友も撃つめあはれなり然れども信濃路誰が相識のありと心に當はれ
 めど素より往方と定めぬ何処を投く索あはれ進退既不度を失ひぬ中
 小文吾の思ふ事節を相伴て脱して故郷へ還りけん往方ハ定ふ知られり
 五月六日この地を索めて三箇の友ハあはれ且行徳へ赴け大田ヲ執り相譚
 これより外不了簡あはれと尋思とて彼此ホ旅宿を求めく索一ととも一犬

士也いあはれとかく七月も中流あり一六やうあはれ絶く下総とて
 程よその月の廿ケあま三四日といふ日子ホ不修行徳へ着ととも終案内知るる
 され古那屋の門ホ入んといふされはあはれ子あはれ戸を蓋籠て人影ハあはれ
 いと訝りあはれ扱る戸撥小隻眼をまき裏面のやうと聞ふ全く空房ホ
 かりるおれはせんといふ不退死と四鄰の人ホ諮らふその人答てされはよ小文吾
 どの六月下旬ホ辞家して遂ホ帰らぬ老父ハ安房の親族許呼とれとて
 彼地ホ不かりかちもあはれ奴婢ホ身を暇とてせしめりあはれとありわたり
 といふ現へあはれをいれ介ら古那屋の通家ある市川の大江屋ホ異あるととも
 あはれとゆふび向へ頭をうた掉て否大江屋ハあはれありして幸やうの縁起
 たりあはれあはれ房ハ夫婦ハ六月の日子ホあはれととも搗くかえく釋見ハ神
 隠しあはれあはれん往方もされをりといふされはか懐妙真とのハあはれ死

路費をゆくり限りおれぬ旅寝をせん不遠謀かく後悔あるんれも年来
 習得する撃劍巻法を人の教へて口を鯛の逗苗中の諸雜費を省くべし
 必ひおければ如此と親しく人の相譚の舊書を捨てる新に附くは武藝の
 世評より随分入り教を請ふ所の儂へ盡しかくかりたるこの時中も
 現はた久しく當るるを勧めども居宅を求めた貸座敷とて
 幾人の度武藝の稽古所中と雨ある日おの請を随分弟子の宿所と起て
 幾人とおく教けり勢ひかくの如くも現はたあつともかく京師小杖を駐り
 既小三年お及びたり時小文明十二年（文吾が市川あり）の月も猶り星
 祀り比小あり一が過中を憫を現小ある旦とく起生くめあつこれ四天主
 別れあり只顧索遣んとて東西百里を往復りしと圖に京師小逗苗の

日教じりり今を中一歳を隔り亦小昨宵一夢小犬塚信乃八八の
 親共衛と抱き犬山犬川犬田共侶とてこの旅宿小くおの最大恨を
 以解んとあつと枕小響く鐘の音小驚覺く儂れが夜へ尚刃の時あり
 佛説を笑く泡沫夢幻頼む不足らぬのあつ遺憾一も限りかくはれはとく
 又快く彼五天士の異姓の兄弟骨肉は優を刎頭の交りを虚小く恨を
 らるべにこれわつ後にも路費乏し故をゆくり旅宿をゆくり弟子を聚へて武
 藝を教へて口を鯛へ名利を樂するのふ似たり老幼順逆世も多る人の命
 期一かこも命教のまもるも竭くこの修牙まふあつ四犬士後小信乃を
 て必現八を誓小背死約を違へく相別れを幸ひ年来京師小住ひて二己の
 名利を謀るふけりといわれん疑ひかあつんふふ誰か誰か誰か誰か
 べに此の死しても朽る死十載不滅の迷恨を也當所を立さうとゆふ東

赴くべし西國四國より来るはれ。おのふも友達へみか開東お生れり遠く
 京師より越え西小田原へくもあはれ。中大江親兵衛ハ神隠しあつと云
 去々歳この地不承も此遠れ大和の葛城大峯近れ愛宕高尾鞍馬深山を不
 攀登りて索ゆか。その甲斐あつて此度いづこ東海道を真直小鎌倉へと
 必へども伊勢尾張より東中々諸侯あつて割居て新関のまわれ。旅人の往還
 不便のうそのゆえ定うかかれ。又近江路より中山道を下るべしとあつて
 必へ決りて。門人の甲乙。舊里より親族より猛小招き一義あり。東國へ
 帰る。この美を送り。侍へ。いふ人々驚き。辭を盡して禁め。か。苗
 べぐもあはれ。夏之趣云々と同門門小侍る程。現八も下日もよく立え。は
 多ども衆皆別を惜む。苗別の為席を開く。是首の勸盃。彼首の。饌
 まで。招き。日の多れ。七月過く。八月。既半。現八。竊よ

焦燥之頻小辞し。起初の準備。他。夏もあはれ。門人。小苗難て。錢を哀め
 銀の兄之贈り。路費の資あり。とけり。も。程。現八。行装を整へ。その詰。且
 門人。小別れて。東へ帰る。不。後。小。跟。先。小。立。逢。坂。山。の。ゆ。り。を。送。り。ゆ。く
 りの多り。と。やう。あ。推。苗。や。終。小。袂。を。分。ち。り。り。の。そ。や。ぬ。旅。も。急。ぐ。れ。り。
 その日。い。や。く。と。十。里。あ。ま。り。守。山。の。里。小。宿。り。を。投。め。て。か。内。初。と。や。く。程。小。既。日。を
 歴。く。上。野。や。遭。坂。の。里。あ。ま。り。三。と。を。以。来。三。回。あ。ま。り。この。山。里。を。過。れ。ど。も
 あ。あ。坂。の。只。名。の。と。や。あ。友。小。遭。ふ。り。も。か。あ。り。と。荒。茅。山。あ。ま。り。路。の。程。も
 遠。く。切。な。旅。の。心。や。焼。雪。夫。婦。が。戦。没。の。迹。を。見。る。と。雲。の。お。る。明。巍。山
 邊。小。進。入。る。と。半。日。中。て。既。中。や。件。の。山。の。ほ。ろ。り。の。彼。焼。迹。小。ま。る。く。を。れ。を。
 草。の。彼。此。小。生。繁。り。と。半。餘。焦。れ。常。盤。木。の。枝。を。生。葉。を。布。く。復。葉。も
 多。う。れ。有。つ。る。家。の。迹。を。埋。め。ぬ。び。住。る。人。も。忠。臣。孝。子。義。姑。節。婦。も

江戸より
庚申山へ
行程
熊谷七里
中瀬四里
大原三里
大原二里
大原一里
花輪三里
津入
中瀬
足尾
唐山

野の掙をせしむ。旅人小備れてかの御導を仕立てり。あの鳥銃をの折用は
 のとるは又圓竹の半弓の武藝を特む行客の導者を備ひぬらぬも必あらずと
 箭を買とりててゆたかへ了直の廉地を旨とられしが掛流しとるの類やくいと
 不通東あつたれどもよく架これ矢頭在つて殊さう小弦と鉄のびくも真
 物を用ひたり。兎も亦庚申山の麓を踰んと欲りし導者を備せぬと
 四六へゆらぎの弓箭を携さみつら衛をぬへり。御導者ハ六里の程を鳥銃の
 丸と火薬と火索も加へ賃錢を三百文と定むり弓箭の價もこれと同トとわ
 らん好まふ仕しとれぬれ且く俟たぬ。わが路へとあらざれば旅客もさあへ木知
 案内の崎嶇をひとり要知るべきと辭せしむ。説示を現八宝を冷笑ひ
 たら然るものあるふねどこれ亦この年来美濃信濃の深山路を幾通と
 ち過りし導者を憑せり弓箭も借りせられ山賊益獸の患ひありとらば

此の丸杖も件の庚申山ハ作麼の魔所ぞ白目もゆらり人の怕をあらは
 一切あらぬと詰れが鴨平眼を睥して兎も他郷の行客かれ縁故を
 ぬあつて疑ひも疎齒は似たりあらぬの報あらず言長くてもさあへ
 柳赤岩庚申山下野州安藤郡あり二荒山と相距ると西のこ七里中てあ
 りの路五里はあられこれこの細芋の里ありやくと十町ありやと前凸の
 山路之既やと登ると二十町中て巔に至り又下ると十町之の所より銀山の
 一里の間水澤を傳ふ路の苦辛へのべくもあらぬ又登りゆくと大約三
 里あまり中て庚申山中第一の石門不到るべし主俗これを庚申山の胎内實と喚做
 造化自然の石門をその廣だと方十間この外より進ると二十間許して左
 右に建る大石あり高各五六丈その形二玉の如し
 念経親門正統これ天工の至妙なりと鑿りて鏤まると彷彿たりこれあり奥へ入

命怖れ絶くやうのかりし近屬中居松原の村間赤岩といふ地方赤岩一角
武遠といふ箇の郷士あり心飽を猛くして名々武藝の達人一日その門人小
告くゆやう傳はく赤岩庚申山六十劍破神代は雅日靈尊素盞鳴尊藤田
日子個三柱の太神神護相謀ひて件の山を登らせし石を穿て室を造り
橋を渡して路を通し住せし神迹かて数万歳の後皇朝早八世の女帝
稱徳天皇の神護景雲元歳釋勝道志願依く下野州二荒山を開け初
かるる庚申山を攀登りて彼三柱の太神を親しく参りて世の口碑云
傳れども今七百十餘年の星霜を歴るる胎内實をうち過く件の山は
奥の院をえりていふの絶くや。是當國の郷士として間近に住る高嶺の
奥にも見盡ぬむ莊客門外異形を身怕をもちて似たり翌日夙夜登山して
數百年の蒙昧の迷ひを釋んとやめ各各位も同意を以て相伴すべとのふ

衆皆呆れ果て辭齊一諫をかう先生の武藝勇力も如右をひてもあひしを
理りていふをもうせふあつた件の山路の峻しく且谷川を渡りて自然の
石橋虹の如く苔滑りて進みかごと故老の口碑傳へり加梅彼山中水精
あり或いは是數百載歷る野猫ありその猛兇と虎の如くその変化測るべからず
り謬く山中迷ひ入るものありと忽地引裂啖せしやうされりる先生也
傳へばせぬいけんされがと露をうりも怕れぬよは深あつた後君子の敢危邦を
孝子の巖壁の下を立むとらひ本文もゆゑや孝子の親をもちける親ものも
その子のふ自愛と危な近づく亦慈ありといふ事。みづる賢慮を回して
おひをありぬんてを願くといはせもあはば赤岩の呵々と冷笑く原来
おひく怯むか大約深山大澤の鬼魅妖怪もあつたや武術を學ぶ何のゆゑ
昔平維茂は山隠山あり悪鬼を退治し又源頼光は大江山あり妖賊を討夷る

きのちけも還るゆり多縁故を誂れば赤岩ぬ微笑ききのふれ頻り不進
 ひとり石橋を渡ると死且彼此をええのふ宝藏に似る大石あり又三重の堀
 似るも又屏風に似るもあり葦葎の引牛とふふ不似るもありこの餘或舟或
 金或へ鶴亀に似る自然石の巖として音あり磔死として伏せあり天造地工の
 指妙多見れども言葉不述くく画くとも筆不写し易く了れり岩窟教
 个所あり上古穴居の址るべし既中て登盡すと記前面は三箇の窟室あり是
 則奥の院あり駭然として向上げ屹屹と高起と二三丈磧分峻分
 その嶮切を近づくべし其の窟の形る中宮ハ□や左へ△右のくこま
 かりは便是天地人の三才象るもの状その窟口の廣起とあつく八九尺あるべし
 所謂雅日靈尊素盞鳴猿田日子と共三神隨古鎮座の舊蹟あるん状
 この窟口の神前石様三隻並びりその形状非禮勿視非禮勿言非禮

勿聽の三歳中も亦是自然の活石に庚申山と名つけハ蓋これに依れるの
 神祇官の記云庚申の日小件の三神を奉拜せといへりあふ至る年来の疑念
 輒氷解して深信肝膽銘りこの神室を拜と果て右の方小陟すと数百
 歩の程中東の陝ともいひつべた嶮峻なる山陝あり眺望尤奇絶に其処より又下る
 正九四町あまりありして平あり大石ありその長十八丈高廿一丈餘りあり
 建屏風に異ありこの平岩の断面より八町あまり東へ下れば胎内窟あり
 出づこれ今も来つる順路に介るふきのふれ奥院をめぐり果て東陝あり扱
 降を辿りもかへる折々雲忽地足下不起りく晦瞑瞬息暗起と野干玉の
 夜ふ異ありねばあつる心迷ひく平岩の断面より東へ下れば後ふあり
 謬る金石のほとりあり未申る岨路へ頻り不進とく程ふる足踏之
 して數十仞ある溪底へ忽地墮と滾落り然れども幸ひ不底中砂礫の三中て



